

賀茂季鷹の『狂[訶]云禁集』：翻印と解題

盛田，帝子
九州大学大学院（修士課程）

<https://doi.org/10.15017/9440>

出版情報：語文研究. 76, pp.37-52, 1993-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



賀茂季鷹の『狂謡云禁集』

— 翻印と解題 —

盛田帝子

はじめに

『狂謡云禁集』は、付箋・書き入れなどによって手の加えられた版下本風の稿本である。佐藤悟氏の御教示によって、現在、聖心女子大学図書館の武嶋文庫に所蔵されていることがわかった。本書がどのような成立過程をたどったのか、今の所具体的にはわからないが、かなりな糾余曲折を経ている事は事実である。

季鷹の作品をまとめた狂歌集については、弥富破摩雄氏の「加茂季鷹の歌学——詠歌概言を中心として」（国学院雑誌四〇ノ七、昭和九年七月号）に『狂歌五十首』が存在すると書名だけは報告されているが、且下のところその所在を確認できない。これに対し本書は、これまでまとめて接することの不可能だった季鷹の狂歌を一三〇首も収録している。『狂謡云禁集』がまだどこにも発表されていない資料であると同時に、歌人季鷹とはまた違った狂歌詠みの季鷹としての詠風や交遊関係等を紹介できるのでここに翻印し、最後に書誌と簡単な解説を施したい。

翻印に当っては、つとめて原本に忠実になるように心掛けた。但し次のような私意を加えた。

一、本文中には適宜句読点を施した。

一、付箋による訂正は、訂正箇所を□で囲み、訂正後の形を掲載し、右側に訂正前の形を記した。

一、書き入れは、その箇所を*印の後に記し、内容を〈〉で開んで記した。なお朱による書き入れの場合は、右に波線を付した。

一、解説不能の箇所には、●と記した。

一、疑問の箇所には（ママ）と付け、下に正しいと思われる形を（ ）で開んで記した。

一、丁移りは、「（一オ）のごとく記した。

一、便宜上、狂歌の上に番号を付した。

凡例

『狂歌雲錦集

狂歌雲錦集』(題簽)

(扉)

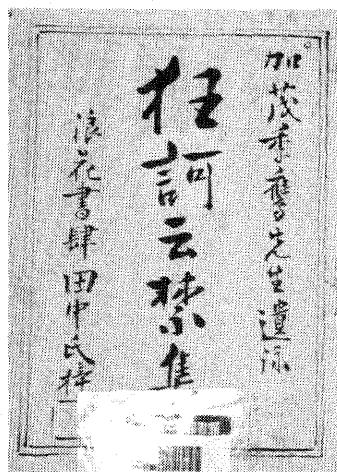
『賀茂季鷹先生遺詠

狂謡云禁集

浪花書林
宋榮堂梓



*序一のどに〈序文〉



*のどに〈上袋大体此格好〉

(扉)

『加茂季鷹先生遺詠

狂謡云禁集

□▼注(一)

云禁集序辞(序題) 浪花なる何某より云禁集といふふみをおこせつ。打ひろけ見るに倭歌のひしりともて仰くなる季鷹翁のされ哥をそ書つらねたる。此翁は早うより学さへの聞え高く、雇よるとなくてうあつかひに暇なくおはすめるを、いかなる隙にかたはれ言はよみ出給ひけむ。素より翁の住所を雲錦亭と」(序一〇) よふめれば、其文字のこゑをかりてさる上書はしたまひけらし。いてやあされ歌は万葉集はさら也、散木集、山家集、拾玉集などにもとりましへしるしつけたるは、そのかみの人々もかゝるすちを打すべし。時に臨みてはものしつる也けり。世にはなまものゝゆゑよしり顔なるか、いたく心おこりして、ひなひたる事はふさはしからすなど言くたして、」(序一ウ) ひちもちいかめしくふるまふめるにくらぶ

れは、此翁の心たかさ、あかれる世の人々も実かくこそとおもひ合せられて、感する心のわりなきあまりに、ことさらに筆をとりて此はしつかたをかいかけすになむ。 六樹園のあるし 石川雅望（序二オ）

富士の山の絵に
二、とのやうに高ういふても三國に直きり人のない山は富士の根
春駒
三、はつ夢にはる駒見れば夜中でもあかつきにてもよひとや申す
つくはね」（一ウ）

四、つくはねの屋根よりおつる音までもひいふう御代の千世の数かも

も

立春

五、きのふまで金かるわさの世話しなさけふはかすみのはるそのと
けき

左義長の絵に茶席に掛け讚をせよと乞れて

六、注連かさりとんとゝ上る此春は茶義長せりといふへかりけり
萬歳（一オ）

七、見はたせは居間も座敷も七五三縄錆り間毎に目出たうさふらは

れけり

七艸の入し籠に梅の折枝をそへしに

八、七野からつんてきたのゝ若菜とてかんこう梅を折やそへけむ
はつ春に大食する人を見てよめる

九、はつ春にあかつためしの多ければ一座は耳目おとろかしけり
（一ウ）＊一ウののどに「朱のすじはほりおとすべし以下皆同
断」▼注（二）

小山氏此花と名付て白粉店をひらかれる祝哥に

一〇、なにはめに賣や此花冬こもり今ははるへとかふや此はな

春野

一一、むつましき春ののへかなぢゝこ草はゝこありけり嫁菜有けり



長（題辞）（序一ウ）

*序一ウののどに「此」一丁半めし盛の序文入

長

一、首長く口はしなかくあし長く齡もなかくよく
雲錦戯画贊（一オ）
▲



土筆

三、すみれ咲野辺の芝生をかき分て見つれば土の筆もありけり」(二二)

(オ)

長樂寺の花盛を見に行しに美人とも多くつとへりければ住僧をおもひやりて

僧をおもひやりて

三、山寺のさくら／＼と見に来ればつとめさへたゝうか／＼の春

花薰風

四、にはひきて名高きはなの名所とはくらまきれにもしるき春かせ

壺中菴より弥生末つかた馬のはなむけにて「君か宿に咲た」(三ウ) 桜のちらぬまといさむもをしき馬のはなむけと

有し返し

五、口とりもいさましき馬のはなむけに宿のさくらはぢりぬともよし

風

六、佐保姫にのほりつめたかやつこ風かすみの袖をふりもはなさぬ

蛙合戦

七、方わきていとむ挑みにすゝみつゝかへるはおのか名のみなりけり」(四オ)

柳蔭に鶴の落たるに雀と犬の子のゐたるかたに

八、散かゝる柳のかけの桜駒ならぬ犬もいさみすゝめり

卯月のはしめ岩倉山の桜を見て

九、岩倉のはなは卯月にさきにけりきちかひなから滝にうたすな

二条川原の茶店に藤の花盛りなりけるを見て

一〇、茶屋のうちに打出て見れば白妙の」(四ウ) 藤のたなにも雪そ降ける

江戸に在し頃、巣鴨といへるあたりに牡丹屋とておひたゝ

しき牡丹のさかりなる頃、千蔭とともに見に行けるに、いとゝ道遠くおほえ汗を流したるに、ちいさき堂ありて、そこには西行の木像をすえて笠に木鉢を替におきしを見て千蔭へ木鉢とて社立とまりけれといひしかば

三、あるかせて湯水流るゝ木の本に」(五オ)

山上参りのかたに

三、谷底へおんころ／＼と落さしと先達はまつさきへまさるしや

鷺艸を人におくるとて

三、此鳥はうへも飛びり鷺艸のみつ羽四羽にはね作りして

くらへ馬を見て

四、たかき木にのほりて見れば人煙たちてけい馬は賑ひにけり

千蔭より撫し子のたねを乞に」(五ウ) おこせし時、下すと

て包紙に

五、都にてふよ花よと撫し子をあつま男の手にまかすなり

五月末はかりに飯盛か菅笠をおくるとて「日あたりにあた

らぬやうにめし給へ半夏過ての竹のこの笠と有し返し

六、やとりては樹の蔭も忘れぬをまして六樹の竹のこの笠

養老館鯨主家へ祇園會に」(六オ) まねかれしに、床に貞

徳、季吟、貞柳の狂歌の軸の物をかけて一首と乞しかば

七、此道にあつき心としられけりきやう哥三ふくの夏のかけもの

祇園會の絃めそを見て

八、絞めそは其日おとしの鎧きて下には汗のくさりかたひら

團扇

九、夏ながら秋かせふくはうちばにておには外へといつたそか

れ」(六ウ)

三人よりて鋸にて西瓜を挽かたに
のこぎりの目角をたてた三人もうす赤とのとはしらすや有け

ん

茄子の絵譲

三、おもしろきふしはなけれと望まれてさんなす人は加茂の季鷹

葡萄棚

三、太刀はさやおさまる御代のしるしとてふたうは棚に上ておきけ
り

日野資枝卿へ後園の芋を」(七オ)おくり奉るとて

三、都より北の方なるいもなから御臺とこにはいかゝとそ思ふ

七夕の頃よめる

四、盆前に誰か金をはかさゝきのはした銭さへほし合のそら

二条川原の相撲を見しに、鏡岩をはじめ西方ひいきの人多く

きに、東方勝つゝき花も多かりければ、色のなほるやうの

哥を只今よめと云しかば」(七ウ)

五、南鎌か東へおほくきたさかい是からにしゆかかち／＼となる

なめくしり

三、夕かほの垣根をつたふなめくしりひかる源氏のあとをのこして

とうの芋の絵に

四、是かほの絵そら事かや只ひとつかいてもとうの芋と見えけり

茶筌賣

五、世の人に大福あたへわれはたゝ」(八オ)茶筌を賣てくうや上人

六、鬼は外福は内へといりまめのままでことしもとる年の数

大いに金大福ち／＼もふる

四、

甲子祭にまねかれし夜、ふろふきをもてなしける祝うたに

四、大こくふを大黒とち／＼めふるふきを不老ふうきと申のへはや

西は長崎東は松前などより、珍しき物を人の贈られけるに

独り」(八ウ)こちける

四一、珍らしきものゝよるのはうれしうてとしのよる社わひしかり

耳遠く成し頃独りこちし哥

四、我耳の遠うなりしは年を経てきこえぬ哥をよみしむくひか

狂言の節分の絵に

四、鬼は外へ打出の小槌うち出してかくれみの笠やるまいそ／＼

七福神をかけるに」(九オ)

四、一ふくに七福神のより合は蜂ふく人もあらしとそおもふ

知恩院の宮、煙管を縫かき給ひて讀せよと仰られければ

四、うつし絵に只一筆のおきせるもやにこうはない君か墨色

四、背面の官女のかたに

四、紫かすはうかないしうこんかやこの赤染のえもんつけしは

美人」(九ウ)

四、たましゐを見る人毎に飛すれば命とりとはいふにや有らむ道具市を見に行しに、其家の主一首と乞しかは

奈須の与市は宗高。夜部の市はうれたか。私は加茂の季鷹。

四、哥よむすへもしらぬに一首と乞れて

四、さあなんほ是も三十一文字の安哥なから先口ひらき

四、さあせ下総の国鉢子といふ所に豊後屋」(十オ)田護といふ人有。其家に逗留しけるに、ある日哥會はてゝ、今日は大

食會して都人の眼をおとろかさんとて催しける。七十に

餘れるくすし某か大食せる事はかねて聞及ひしか、牡丹餅

を三十七喰しあとにて茶漬を二椀さら／＼とくひしは、其

地の人たにあきれけり。さておの／＼頻りに喰て、季鷹に

も大にしひければ、すへなさに膳をもちて勝手へ逃げる
に、其頃は甲斐權守に」(十ウ)任せられければあるし「信
濃にちかき甲斐なかりけりといひかけり。こは大食する
者を江戸にては信濃ものと常にいへはなり。扱

呪、豊後屋の亭主もはらははりまにて

と付しかば、彼、衣のたてはほころひにけりといひし昔お

ほゆれば、飯合戦の記を書よと人々望みしかば、すなはち
かきて一巻となし残しつ」(十一オ)

七月廿六日入道一品宮へ参り、廿七日は小田原侯おだはらめさとへ召れし

呪、御御當座の後に齋麦をたまはりしかば

五、御御夜食を夜部は一品宮でたへけふは四品の大名のそは

江戸へ下りし道にて「家にあれは筈にもるいゝを艸枕旅に
しあれは椎の葉にもるとよみし萬葉集の哥をおもひ出で

五、家にあれは香の物でます夕めしを」(十一ウ)旅にしあれは平
付でくぶ

かくて枕をとりしに、衾のむつかしきにはさすかに旅のし
るしは有けりとて

五、あかつきをとりもすゝかぬ古ふすま草のまくらは誠なりけり
江戸よりとて、北野天満宮へ若き女の小袖のつまに錠おろせし

絵馬を奉りしを写して、贊を乞しかば

五、くらへこし振わけ髪もかた過ぬ君ならすしてたれか明へき」(十
一オ)

竹に雀の絵に

西、すゝめ殿お宿は竹としられけり立ても居ても千代々々の聲

弁慶勧進帖をよむかたに

つら／＼案するに、数千蓮臺の望はなけれど、此世にて無無
比の樂みにほこらん事は耳よりなれば、あはれ其世にあら
ましかば、一指半錢の勧めにはかならすもるましきをとて
筆はそれと、此贊を見ん人、あたかも瓦礫のめしといはん

か」(十二ウ)

呪、火のやうになつて勧進帖よめは閑の人々きもをけしけり

青龍刀を書きし画を額にして、守になるべき哥をと乞人あ
りしに

呪、掛置て昼夜まもりに青龍刀こゝの菅公からの閑公

堺へ行とて大和川の堤を通りしに、ほそき道まで蘆の生出

たりしかば

足もとまともあしは生けり

といひしに誰も付さりしかば」(十三オ)

呪、野の花の薰りもはなに遠からて

岡本経賢か、竹藪のやしなひにて「川原より土を多く入さ
せて、そこに菜をまきしとて「川原の葉を●よりてふる物をくははせ」
子はうきなのたねとおもひ給はれとて贈りし返し

五、川原より土を多く入させて、そこに菜をまきしとて「川原の葉を●よりてふる物をくははせ」
江戸にて、ある夜深く真顔か家の前を通りしに、發足前も

近付たれは立寄て」(十三ウ)

呪、かほとまで眞貞のぬしは寝顔ても笑かほてわれは見まほしう社

といひしかば主返し現にも夢にも今宵加茂の大人しかも
寐床へ見えたまふかも季鷹の不時に訪らひ給ひしはよき
夢を見心地社すれ

六、うまゐする君をは不時にとひ来ても音とや申す夜半の樂しさ

あるし「夢ほとのまづい物をもまゐらせすあたらうまるを
さます」(十四才)君ゆゑいたう夜ふけにたれは、駕を繼
かへまるらせんといへは

六、大方は手にすゑ鷹を駕にのせて飛かことくにかへすうれしさ

あるし又「よもすからこにおき餌にすゑ鷹をとまり山と
付て

六、すゑ鷹をはなし相手に君かせばとんだ事とや人のいぶらん

此やうなむた事をのみひて毎日」(十四ウ)紙をついやす

もなすよしもかなとあるに返し

六、千早振神に仕ぶる季鷹かみをはあまたつかふあやしさ

をしへ子平塚氏の狂哥名に鷹の字を望むに贈しかは、「一世
鷹と付て春宵にいやまさるともたかくらぬ君か譲りの一字

千金とあるかへし」(十五
オ)

七、天の下にこんから一世い鷹三には是から名はひくへし」(十五
オ)

奈良の萩の能見に下りしとき、藏人春乗か家にて物多く

かゝせければ

奎、腰をれと悪筆の恥をとりならへかきさらしけり加茂の季鷹

南都にこんにやく橋といふはし有とて狂哥を乞れて

六、ほろ味噌も付ぬ【古語】こんにやく橋なからわたりあんはいよしと見
えけり

伊勢阿漕か浦近き所に藤枝といふ有。その五明樓に登りしに、おひたゞ」(十五ウ)しく物かゝせし禮に、またの日

駕をもてむかへにおこせしか、えさらぬ事ありて駕をかへすとて

八、としたて阿漕か浦の貝ひろひ度かさらばわらはれやせむ

竹の内にて狂言尽し有し日、花折新發意を、鷺仁右衛門か

江戸より上りし時しけり。其あと花を、しらぬ人の棧敷に多くもたるを、わらはへのほりしければ、名はかゝて」

(十六オ)

九、時しらす匂へる花の一枝にかかるはかりのことの葉もかな

といひやりければ、ふさやかなる枝をなんおこせてき、そ

を又わかちである人の棧敷へやるとて

九、此はなはたのふた人にもらふたそ外へはむさとやるまいそく

難波に下りし時、船中に小者の脇さしを残し置しを、伏見

ヘ申遣しける文の奥に」(十六ウ)

十、脇さしのさせる物ではなけれども打捨てしもおかれさりけり

浪花の舟中にて物多くかきしあとに、駱駝の画あまた出

し、贊を乞れしかは

十一、膝をみつに折ばかりかは骨を折けふを楽駄と何おもひけむ

浪花の雛丸子より贈らるゝ東脩の代りに、我かねて望みし

前漢書を一部恵まるゝとて「御祝儀にかふ」(十七オ)れば

ほんに是を社前かんしやうといふへかりけれとありし返し

十二、やり先かかせん堂なれば頼てまた御かんしやうをもたまふへき

也

同じ主哥仙堂に訪来て、終日物語しくらして其夜とまられ

時へおはなしは山々鳥のしたり尾の長居をしつゝこゝに

かもねんとよまれし返し

七、山鳥の尾の長き口もあきたらすおはなしなからふたりかもね

ん」(十七ウ)

おなし國手に菊桐を時絵にしたる盃を贈るとして

八、菊桐は太閤様のやうなれば大きかもりといふへかりけり

同池田屋某か短冊を乞し礼にかつを節を一箱贈し返事の奥

に

九、一節に千世をこめたるかつをふし御禮のだけはかきも尽さす

同種丸へ加茂の君の流れいたゝく大坂もの朝夕汲し川水の

外」(十八オ)と云おくれし返し

六、汲かひも今はあらめやとし波のよりとよりにし加茂の川水

同壺中庵、書画帖の序を望まれければ、下らぬ事を書いて贈

るとして文の奥に

七、筆とつて書ては見れとかき得ねは君はほや丸われはあやまる

ある家にて、色紙短冊をはじめて画贊などおひたゞしく望

みける中に、青梅の繪有しかは」(十八オ)

六、絵は青梅日かな一日筆とつて肩かはりやす是てさんとめ

ある人べ心ちりけをすゑ鷹の君なと有し返しに

五、さしも艸さしもじらしとおもひしにすゑたかやいととはる嬉しさ

墨を贈りし人に

六、ちよつと見にもすみよしと思ふ松風はさつゝと書ものにつかはし

北村文鶴か扇面の画贊を乞しに」(十九オ)へ燈しんでぬく

ひたまへや此贊を油流してかきはしたれとといひおこせし返し

八、かきたてゝ君が賜ふにあんとして屏風一雙の光りそへけり

おなし人と蟻通を語し時へ哥人も宮人もまた君なるを御相手にシテうたふわりなさと云しかへし

九、貫之の眞似はすれとも謡にはあやまつて申加茂の宮入」(十九ウ)

六、貫花葉と名付し橋屋の菓子を千蔭におくるとして

七、立花は手さへ哥さへ其身さへ江戸にしもおけといやみやひ人

八、蕎麦をもらひて久しうなれるなどいひて振舞ければ

九、そはに置て昼夜ねんねこゝといひしもねこにならぬ味はい

六、酒のうたを乞れて

七、よやへんといふは酔たの酩酊を」(二十オ)いたしたといふはま

た酔ぬなり

八、小溪豊城か奈良漬をおくるとて「夢ならで一富士二鷹さん

くのなすの風味の的ははつれつといひおこせしかへし

九、茄子をば一ふしに出すゑ鷹か珍客の日をおとろかす漬

六、錦小路に住し頃、其隣に赤味噌の有しを誉ければ、主に一

首と乞れて

七、外よりも分て見事な赤みそは」(二十ウ)錦のかうしなれば成へ

八、名にしおふ三輪のしのをた巻もけふは祝酒の過し管まき

九、ある所にて蕎麦振舞に、はじめは伊吹、中程より信州とい

ひしかは

六、しんしうか一向宗かしらねとももりは大般若はらみつそはしや

中村芝翫か藝を見し日」(二十一オ)

七、天台の止觀は四明當代のしくわんは芝居加賀やかしけり

其夜、井筒にて徳者堪忍後萬歳と芝翫か書しおくに

八、幕毎に日出たうさむらはれけり

一力楼に登りし夜、いと大きなるみちのく紙をあるしかも

て出て、懐帯をと望まれて

九、腰をれの哥でもこゝは一力入てをんなのこゝる動かす」(二十
一ウ)

其後井筒へ行しに、此懐帯をうらやましとして又乞しかは

十、迎も世は夢そゆめをはゆめとして悟らすしらす世をすこさはや

浪花北の新地に寅吉といふ太鼓もちあり。それか家かまへ

て両替屋の店出すとて、藍江に菊の画をかゝせて贅をと乞

十一、(美濃二十九年) しかば、
西、二十五年持し太鼓の手をかへて金もちになるときくそめてた
き」(二十一オ)

十二、大津へ下りし時、清水某が蒸くわしを贈りし長文のおくに

十三、清水ならざそ鬼役はすんであるとつて一口にかもの季鷹

漢丸子より折鷹といふ煎茶をおくりて「名にしおふ君か御

名にはいかゝやと思ふてても骨を折鷹といふておこしけ

るかへし

十四、汗かいて筆ひつつかみ季鷹かほねはをりたかうたはこし折」(二
十二ウ)

十五、中長者町に住ける頃、あや丸子のとぶらひ来て「雲錦をの

猿廻しのかた

へたる中の長者町旅宿をこゝにすゑ鷹の君とよみける返し
十六、雲錦の金銀の中の長者町旅宿をすゑたかひなかりけり

十七、狸のはら敷うつかたに

十八、月ひとりすむ古郷にはらつゝみうつやきぬたを打かへしつゝ

十九、山梶子山梶の子と猿のかた」(二十三オ)

二十、よしあしをいはざることはましらなれ禍ひの門をくちなしにして

二十一、錦帶橋の絵に

二十二、周防なる歸の川の常にせるはしは絵に見る由さへあや也

二十三、蜘蛛の巣に天狗の引かゝりたるかた

二十四、あらし吹くらまの山の蜘蛛の巣にかかるや木の葉天狗成らむ

二十五、布袋の絵に贅を乞れしに、久しくなるを催促しければ、い

てとて」(二十三ウ)

二十六、とのやうにゆすつても出ぬ此さんははらみ句のなきしるしな

二十七、おへし

二十八、大黒の米俵負たるかた

二十九、さ

三十、もち米かうるかしらねとうるほひて汗をばふくの神のたうと

三十一、大津絵

三十二、大津絵の藤の花みればむらさきのあけをうはふは誠なりけり

三十三、同しく鬼の念佛

三十四、目に見えぬ人の心をそそろしき」(二十四オ) 衣を着ても鬼はおになり

二六、それそこでお染といはつたつ田山紅葉にまさる顔の色かな

猩々の手妻する絵に

二七、足もとはよろ／＼してもとつくりと得たる手妻は達者也けり

伊勢鰐

二八、いせ海老はみな縫おどしの鎧着て床の真中にかゝりけるかな」

(一十四ウ)

羽箒と金しきの絵に

二九、やかましき浮世のちりをはらひけり月雪花のみつ羽箒に

碇に蛸と鱧をかけし絵に贅を乞れて

三〇、たこは田子の浦の藤ともこしつけんせんすへなきははもの季

鷹
梟の糊桶にとまりしかた

三一、ふくろふののり摺おけの聲きゝて鶴衣やときあらふらむ」(一)

十五才

僧僧多くたく鉢に出しかた

三二、禪氣機なく工夫もなくてそもさんはこれも八百萬のうたくはつほんのう

よのう

蛤の棲園を吹し絵

蜃氣樓の画に

三三、浪の上にうてな金殿かゝやくは飛驒のとなりのかひのたくみ

か

三猿

三四、よきことは見もし聞もしひもせよおこらさること真ざるな

りけれ

韓信」(二十五ウ)

二五、其後にまたくる人のあらばこそないので和漢ともにかん信

龍か犬を捲て天昇するかた

二六、まき上で大ころ／＼とおとすらし雲にはえけん類ひならね

は

鬼の腕のそはに鬼の子の泣絵

二七、とさんがあら鬼ならば一力て手のない方といはれなさらん

大黒とけぼうの角力のかた

二八、大黒の俵をしかとふまへたら」(一十六オ)あたまでまけはとるまいのものを

三番叟の絵に

二九、はん昌さ舞おさめたる日出たさに贅する我も悦ひありや

女達广の贅

三〇、よしにしなよし悟つてもまよふても柳はみとり花はくれなる

おひたゝしく物書ける中に達广の画ありしかば

三一、筆とつて手も達广なりそもさんは」(一十六ウ)是きりにして

やめんとほつす

布袋の絵に

三二、携へし布の袋ははん物そ一もつなしと悟りにし身に

月下に鼈の絵

三三、やは長し月はみつちのかはの邊にかしら打上で見るやすつほ

ん

うんてれがんのど畜生のあほかいなどいふはやり諷のはや

りし頃、孔明か琴をひくを仲達か見上る絵に「(一十七オ)

三四、孔明かはかりこときくうんてれかん思案貞するてきあほかい

角力取鏡岩か入門しける日

三云、関取に腰をれ哥はすまふまいいて一力アラいれて筆とろ

丹波の止丘か乗りし日 宗匠のお耳はよほど遠けれともろ
こし迄も高く聞えつといひしかは

三云、唐人の寐言のやうな歌よめはもろこしまでもきこゆなるへし」

(二十七ウ)

風落しの詞

鷄トリは時ハシメを告。天地の

間に生を得る者もの後たまく彼に害有るものも是には益あり。諺に
いはずや、國に盜人家に風と。是もろこしの書にも出たれば、

汝を悪む事和漢相ひとしといふへし。昔楠正成は城に「重の

塀をかけて敵を溪底へ落せしとかや。今我は枕を高うして汝

をおとす。其はかり事、楠か右に出るといふへし。但し能有や

と問は、升（二十八オ）底にかすかに忠となく。よし／＼忠

は孝にならへて人の重んする處なり。其忠いつくにありやと

問とも／＼又答る事なし。依て一首の調をよんて、汝か最期を

いさきようせむ事を勧む。其うた

三云、升落し我はかりことおち入てあやまちけりなおのか一生

鯛

三云、西の宮て釣たる鯛をつり臺にのせて日出たいたい平の御世」

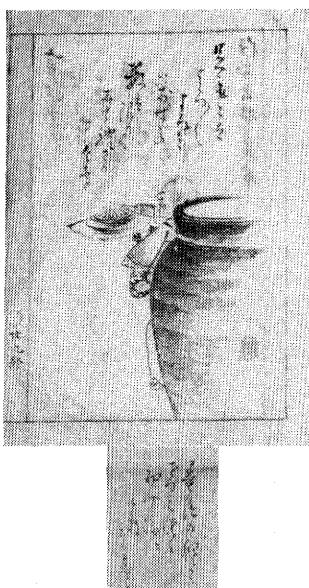
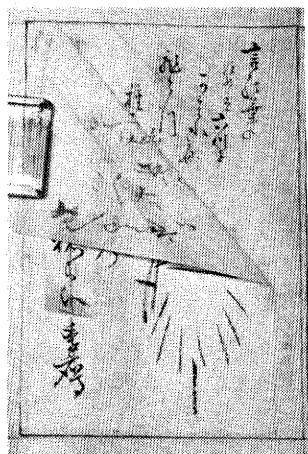
(二十九オ)

三云、足もとはよろ／＼よろと萬世の数は限りもしられさりけり「

(二十九オ)

言の葉の姿はむつにかはれともひとつ心の種ならぬかは

*二十九丁オの欄脚の付箋に「墨絵の狸々ざつと軽く堪介様に御頼
奉希候」



130、あたらすといへ共矢にはとほからす刈田の稻のねらひ季鷹

注

- (1) □は墨書きだが、田中氏の印がおされるはずだった箇所を示している。
- (2) 二丁裏から一丁おきにどの側の枠に朱線が引かれており、枠をひろげる指示がなされている。
- (3) この箇所は、「いふ有そこの五明楼に登りしにおひたゝ」の一行が枠にかかるため書き直された。



解題
一 書誌

聖心女子大学図書館本（武嶋文庫、t 和 9 11・195 / k 41 u）

写本。中本一冊。縦 19・9 cm × 横 14 cm。

こより綴、共紙表紙の上に改め表紙あり。改め表紙は、薄茶色記録表紙。

題簽 紺の二段雲短冊簽。横 3・1 cm × 縦 14・1 cm。「狂歌雲錦集 賀茂季鷹稿」と墨書。表紙左肩貼付。

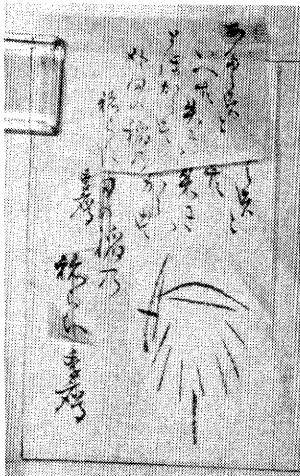
構成 見返し無し。原表紙と思われる遊紙（一丁）、扉（半丁）、白

紙（半丁）、序（一丁半）、題辞（一丁）、本文（二十九丁）、

裏表紙（一丁）、以上墨付三十一丁。

序題 「云禁集序辞」

内題 「狂謡云禁集」



上扉の右下に「武嶋」の朱印あり。

二十丁表の挿絵の下に「土平」の朱印あり。

序題上に「聖心女子大学図書館蔵書印」の朱印あり。

各半丁十行詰め。

二 解説

『狂謡云禁集』は、中本の写本一冊。現在、聖心女子大学図書館の武嶋文庫に所蔵されている。扉は本来のもの上にもう一枚付箋として貼付されたものがあり、仮に、上に付いている方を上扉、下方を下扉と呼ぶとすれば、上扉の右下に「武嶋」という朱印が有り、同図書館に入る前は、武嶋羽衣氏の所蔵本であったことがわかる。

武嶋羽衣氏は本名又次郎。古典主義的傾向の詩人、歌人として知られていた同大学の教授である。同大学図書館には、『狂謡云禁集』(以下『云禁集』とする)以外にも、詩歌に関する国文学書、詩論を中心とする英文学書、また氏の自筆原稿を含む一万点程の旧蔵書が、武嶋文庫として所蔵されている。

『云禁集』には、武嶋氏の朱印の他には、序題の上に「聖心女子大学図書館蔵書印」という朱印があるのみで、奥書もなく、武嶋氏の手に渡る以前に誰のもとにあつたのかは今のところわからない。

本文自体は、他者の詠みかけに応じて作った下句も含めて一三〇首から成る。筆跡は季鷹の字に似せてあるが、題辞の文字とは微妙に違うので、他者の字かとも考えられる。集中の狂歌の内、季鷹の狂歌として、他の隨筆や狂歌集に採られている歌が何首もあるので、異同を示しながら次に挙げてみる。

一、首長く口はしなかくあし長く齡もなかくよく捕ひ鶴(『云禁

集』) → 首長く嘴長く脚長く輪を長くよくそろひつる

(『狂歌一斑』、『香亭遺文全』新保磐次編による。以下「一斑」とする)

九、はつ春に大食する人を見てよめる

はつ春にあかつため
しの多ければ一座は耳目おとろかしけり(『云禁集』) ↓

初春大食の人を見て 初春にあがつためしのおおけれ

ば一座は除日驚かしけり(『徳和歌後萬載集』日本古典文学

大系「川柳 狂歌集」による)

三、山寺のさくら／＼と見に来ればつとめさへたゝうか／＼の
春(『云禁集』) → 山寺の櫻々とつたはれてつとめさへ唯
うか／＼の春(「一斑」)

五、千蔭より撫し子のたねを乞におこせし時、下すとて包紙に
都にててふよ花よと撫し子をあつま男の手にまかすな
り(『云禁集』) → 橘千蔭かもとより撫子の種をよにお
こせしにつかはすとて 都にて蝶よ花よとなてしこをあ
つま男の手にまかすなり(『雲錦翁家集』賀茂季鷹著)

四、大ごくふを大黒とちゝめふるふきを不老ふうきと申のへは
や(『云禁集』) → 大こ食ふを大黒と縮めふるふきを不

老富貴と申しのべばや(「一斑」)

四、我耳の遠なりしは年を経てきこえぬ哥をよみしむくひか

(『云禁集』) → 我耳の遠くなりしは年をへて聞えぬ歌
をよみしむくいか(『傍廂』斎藤彦麿著、日本隨筆大成第三
期一による)

四、背面の官女のかたに 紫かすはうかないしうこんかやこ
の赤染のえもんつけしは(『云禁集』) → 官女のあかき

装束したるゑに 紫かすはうかないし右近かやこの赤染
の衛門つけしは『みゝと川』本間游清著、愛媛大学文学資料集による)

四、道具市を見に行しに、其家の主一首と乞しかば

那須の与市は宗高。夜部の市はうれたか。我は加茂の季鷹。哥よむすへもしらぬに一首と乞れて さあなんは是も三十一文字の安哥ながら先口ひらき(『云禁集』) ↓ かもの季鷹といふ人大坂へ來り。ある人すへたかに何ぞよみくられと言。其時すへたか其人の商賣を間に道具屋成といふ。其時すへたか前書をしていふ。

那須の與市はむねたか夕部の夜市は賣たか我はかものすへたか歌よむすべも知らざるに一首とよばれて さあ何んばはも三十一文字の安歌ながら先口ひらき(『浪花見聞雜話』、『隨筆百花苑』第七卷による)

五、ある人 心ちりけをすゑ鷹の君など有し返しに さしも

艸さしもしらしとおもひしにすゑたかやいとはる嬉しさ(『云禁集』) ↓ 季鷹が江戸に来りけることを蜀山人聞きつけて、使ひに書簡を持たせ、百人一首の歌を讃め、且其奥に 敷島の道を達者に行く人は足の三里に灸をすゑたか 季鷹其の使ひを待たせおき、返事を作りて、其の跡へさしも草さしも知らじと思ひしにすゑたかやいと聞くが嬉しさ(『一斑』)

三、角力取鏡岩か入門しける日 関取に腰をれ哥はすまふ まいいて一力いれて筆とろ(『云禁集』) ↓ 相撲の鏡 岩が入門しける日関取にこしをれ歌はすまふまいいで一

力入れて草とろ(『狂歌五十首』、「加茂季鷹の歌学」弥富破摩雄著による)

以上の十首である。

石川雅望の序文に「浪花なる何某より云禁集といふふみをおこせつ。打ひろけ見るに倭歌のひしりともて仰くなる季鷹翁のされ哥をそ書つらねたる。・・・」とあり、扉にも「賀茂季鷹先生遺詠」とあること。また今挙げたように、百三十首の内の十首は、季鷹の狂歌として他の隨筆・狂歌集の類に掲載されていることから、『云禁集』が季鷹の狂歌集であることはまず間違いない。ここまで述べた上で、新たに本書の特徴を観てゆき、複雑な手書きをとつたであろう『云禁集』の成立過程を考察してみたい。

序文は、石川雅望が書いている。筆跡は雅望のものではないが、序一の裏ののどに「此一丁半めし盛の序文人」という版下校正の為と思われる朱の書き入れがあり、雅望の序文であることは間違いかろう。以下、雅望の序文を引いてみる。

浪花なる何某より云禁集といふふみをおこせつ。打ひろけ見るに倭歌のひしりともて仰くなる季鷹翁のされ哥をそ書つらねたる。此翁は早うより学さへの聞え高く、昼よるとなくてあつかひに暇なくおはすめるを、いかなる隙にかたはれ言はよみ出給ひけむ。素より翁の住所を雲錦亭とよぶめれば、其文字のこゑをかりてさる上書はしたまひけらし。いてやあされ歌は万葉集はさらら也、散木集、山家集、拾玉集などにもとりましへししつたるは、そのかみの人々もかゝるすちを打すべし。時に臨みてはものしつる也けり。世にはなまものゝゆゑよししり顔なるか、いたく

心おこりして、ひなひたる事はふさはしからすなと言くたして、ひちもちいかめしくふるまふめるにくらふれは、此翁の心たかさ、あかれる世の人々も実かくこそとおもひ合せられて、感する心のわりなきあまりに、ことさらに筆をとりて此はしつかたをかいけかすになむ。

六樹園のあ
るし 石川雅望

序文の中に「素より翁の住所を雲錦亭とよぶめれば・・・」とある。

雲錦亭とは、吉野の桜と龍田の紅葉を移し植えた上賀茂の季鷹の自邸を言う。春に咲く吉野の桜を雲、秋に色付く龍田の紅葉を錦と見立てて、雲錦亭と名付けて住んだのである。季鷹が雲錦亭に移り住んだのが、享和元年の師走廿日あまりであるから、この序文が書かれたのは、少なくとも享和二年以降ということになる。また、雅望が没した年が天保元年であるから、享和二年から天保元年までの間に、雅望の序文が書かれた、つまり、『云禁集』の最初の出版の話があつたことになる。

次に季鷹の題辞についてである。季鷹の題辞の写真は、本稿の翻印部にも掲載している。この題辞は、『たつとしより已の年うまのとしよみうた』という天保三年から五年にかけて書かれた季鷹晩年の自筆歌稿の筆跡と同じである。香川大学神原文庫に所蔵されているこの歌稿には、「天保六年五月十五日 正四位下 加茂季鷹 八十三叟」と記されており、『云禁集』の題辞もおそらくこの前後に書かれたものと思われる。題辞の「長」の字は鶴に見立てて書かれており、「首長く口はしなかくあし長い長く齡もなくよく揃ひ鶴」という鶴の歌と合わせて長寿の縁起を担いだものになっている。季鷹の没後に編まれた追悼の狂歌集であれば、季鷹のこのような題辞を載

せるはずはないので、やはりこの題辞は季鷹の生前につくられたものとして間違いないと思われる。

扉は、先程も述べた通り二種類ある。

上扉が、『賀茂季鷹先生遺詠

狂歌云禁集

浪花書林 宋榮堂梓

下扉が、『加茂季鷹先生遺詠

狂詞云禁集

浪花書肆 田中氏梓 □

下扉ののどには、「上袋大体此格好」という朱書きがあり、一旦は、この扉と同じ体裁の袋付きで出版される運びであったことがわかる。しかし、何らかの理由で下扉は却下され、新たに上扉が付けられている。

初め二種類の扉を比べて見ただけでは、どちらの扉が正式な扉であるのかわからなかつた。しかし、本文中の、付箋で訂正される前の文字と訂正された後の文字を比較していくうちに、それがはつきりとわかつてきた。例えば、十一丁裏の五〇首目の詞書「小田原侯へ召されしに」の付箋のしたには「小田侯へめされしに」と「、」の印があり、二十三丁裏の一〇一首目の詞書「の巣に」の付箋の下には「の巣に」と「巣」の右に「。」の印が見える。この「、」若しくは「。」の印は書き損じの印なのである。よって、「加茂季鷹」の「加」の字の右上に丸印のある下扉は破棄され、代わりに上扉が採用されたことになる。どちらにしても、両扉には「遺詠」とあるので、季鷹が息を引き取った後、つまり天保十二年以降になつて付けられた扉であることは間違いない。

上扉に「宋榮堂」、下扉に「田中氏」とある浪花書林は、大坂心斎橋筋安堂寺町の秋田屋太右エ門である。この宋榮堂が、実際に『云禁集』を出版したのかどうかは、今の所はつきりしない。しかし、『狂歌書目集成』その他の目録類にはこの名は絶えて見られず、おそらく出版されないままに終わつたのではないかと思われる。

ここで、これまで考察してきたことをまとめてみる。享和二年から天保元年の間に、「浪花の何某」が寄越した季鷹の狂歌集に石川雅

望が序文を付け、それに季鷹が題辞を付けた。しかし、季鷹の生前にこの狂歌集が出版されることはなく、扉が付けられたのも、季鷹の没後の天保十二年以降であつた。恐らくその頃に出版すべく版下本として作られたのが現姿であろう。しかし、その後も『云禁集』が出版されたという確証はなく、武嶋羽衣氏の手を経て聖心女子大学図書館に残ることになったのである。

このように、季鷹の没する十二年以上も前から出版の話があつた『云禁集』が、生前に出版されることなくして終わつたのはなぜなのだろうか。最後に、一つの見解を示した上でこの稿を終わりたいと思う。

『云禁集』の「云禁」は、季鷹の号の「雲錦」という読みに通じる。この題は、明らかにそれを意識して付けられている。『狂詞云禁集』という題が意味する所は、恐らく狂歌は和歌に対して詠み捨てにするものであり、歌人が公的な場所で云つたり、残したりしてはならぬものということであろう。それを、季鷹の号である「雲錦」と掛けたこの狂歌集の題として付けたのである。季鷹の狂歌は、生前から評判が高かった。しかし、いくら狂歌を良くし、門人が多かったとはいえ、季鷹は狂歌師である前に近世後期を代表する歌人

であった。歌人としての実力と不動の地位があつたからこそ、狂歌は狂歌として遊びでやれたのであって、詠み捨てにしていた狂歌を家集として集め、生前に出版するという事は、やはり歌人として考えられなかつたのではなかろうか。

今回述べられなかつた問題がまだ幾つかあるが、それらについてはまた稿を改めて論じたいと思う。

付記 今回の稿を成すに当つて、該書の存在を御指教下さった佐藤悟氏、また、原本の閲覧及び翻印を快く御許可下さった聖心女子大学図書館の皆様に感謝致します。